

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 2 日現在

機関番号：32624

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350706

研究課題名(和文) プレーパークの活用による小学校入学に向けたエデュケア型つなぎプログラムの開発

研究課題名(英文) Edu-care system using community resource to enhance adaptation among the first grade elementary school children

研究代表者

吉永 真理 (YOSHINAGA, Mari)

昭和薬科大学・薬学部・教授

研究者番号：20384018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：(1) プレーパーク活用と体力：プレーパークをよく活用する活用群、プロジェクトにより活用するようになった介入群で比較したところ、体力測定値は活用群がすべて高く、特に、握力、左右ジャンプについては有意差があった。

(2) 千葉県における未就学施設と小学校の連携実態：多様な交流の行事は実施されていたが、ケアの継続性を担うための申し送り等は少なかった。小学校と学校以外の居場所との連携は少なかった。

(3) プロジェクトの効果：保護者の子どもへの心配度に有意差が見られた。また、子どもに対する質問では参加群の方が自己効力感が高かった。外遊びの場での体験が子どもの発達に与える影響についてさらに検討していく必要がある。

研究成果の概要(英文)：We observed that the frequent visits to Adventure Playground in their early childhood resulted in their high ability in physiological activities like jumping and gripping. However, after entering the elementary school, the children would hardly visit there because of the distance and lack of opportunity to use the place. In order to increase the chance to play there, we should strengthen the relationship between schools and the child friendly spaces like Adventure Playground.

The effect of the intervention project playing there at least once a month, being named "Let's go to the Adventure Playground" project, were appeared in their parents' change in their perception of children's development. Concerning children's condition, the experience playing Adventure Playground likely contributed to rise the level of their self-efficacy. We should keep on investigating the meaning and effect of playing outside with adventure experience before entering schools.

研究分野：保健学、臨床心理学、身体教育学

キーワード：プレーパーク エデュケア 心身状態 GONOGO つなぎプログラム 自己効力感

1. 研究開始当初の背景

小1プロブレムということばが使われるようになって10数年が経過するが、問題はなかなか解消されない。未就学施設と小学校との間には相互交流なども実施されているが、効果は一部にとどまっている。その背景には、幼児期にはケアが中心の過ごし方がされていたのに、入学と同時に教育に重点が置かれ、ケアが途切れてしまう点にも問題があると考えられた。教育の体系以外に、未就学時期から入学後までケアを継続する新しいシステムの実現は実際にはなかなか困難である。むしろ、地域にある場を継続的なケアの担い場所として子どもや親が認識することで、入学後も居場所として機能させることが可能になるのではないかと考えた。このような問題意識から、プレーパークの活用について取り組むこととした。

2. 研究の目的

幼児期からプレーパークを活用することで心身健康や体力の向上とともに、地域に居場所や親・先生以外の信頼できる大人（プレーワーカーや世話人）と出会えることが予想できる。本研究の目的は以下の3点である。こうした場としてプレーパークを活用して、子どもの心身状態や保護者の意識の変化について把握することを目的とした（目的1）。また、小学校と未就学施設の連携実態について実態把握を行なった（目的2）。さらに、入学後の適応について、本プロジェクトに参加していた子どもと参加していない近隣小学校の同学年の子どもとで、学校適応等について1年生の後半に親子への質問紙調査結果を比較した（目的3）。

3. 研究の方法

(1) プレーパーク活用が子どもの心身状態、保護者の意識に及ぼす影響調査
子どもについては、体力測定（長座前屈、握力、左右ジャンプ、体支持力、棒反応）、GONOGO測定を4歳時点と5歳時点に実施した。保護者にはプロジェクト開始時、終了時、入学後の3回の質問紙調査を実施した。また入学後は子どもにも学校適応について尋ねる質問紙調査を行った。

(2) 小学校と未就学のつなぎ教育の実態調査

千葉市全市の未就学施設と小学校に質問紙調査を実施した。連携の実態、交流の内容、市内の子どもの居場所や公的施設（図書館等）との連携の実態を把握した。

(3) プロジェクト参加の効果の評価

プレーパーク活用プロジェクトに参加した子どもと、同地域の小学校に通う親子（世田谷区、町田市各1校）を対象に(1)の入学後質問紙調査項目と同じものを実施し、結果を比較した。

4. 研究成果

(1) プレーパーク活用と体力

プレーパークをよく活用する活用群、プロジェクトにより活用するようになった介入群で比較したところ、体力測定値は活用群がすべて高く、特に、握力、左右ジャンプについては有意差があった。GONOGO測定値でも活用群は活発型が多い結果となった。

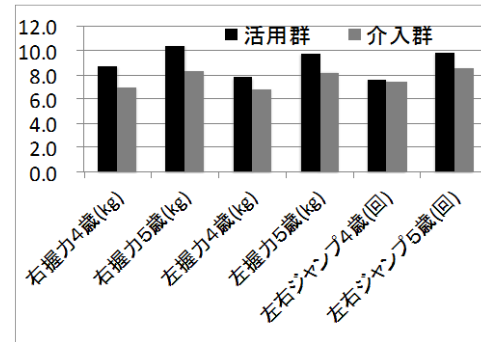


図1. 活用群と介入群の体力測定結果 (特に差が大きかった項目のみ)

(2) 千葉市における未就学施設と小学校の連携実態

多様な交流の行事は実施されていたが、ケアの継続性を担うための、ひとりひとりの子どもについての申し送り等はほとんど行なわれておらず、未就学施設からのニーズが高いのに比して、小学校ではあまり必要性を感じていない、という結果となった。

質問紙内で新しい形式の引き継ぎ用のシート（エデュケアシート）の導入についても尋ねたが、必要性を感じてはいるものの、書類が増える、小学校での活用に疑問がある、等の理由で、消極的な意見が多かった。

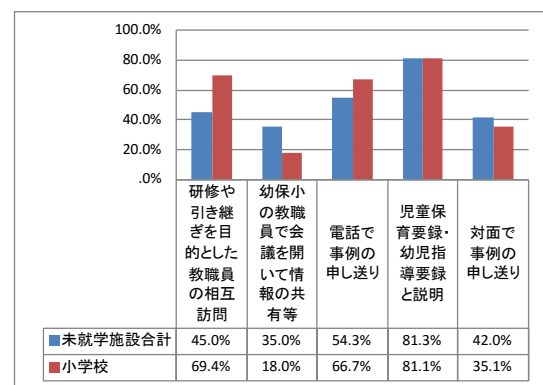


図2. 未就学施設と小学校の引継ぎ・連携の実態

小学校と学校以外の居場所との連携は少なかった。特に市内にはまだプレーパーク開設も多くないので、その連携には限界があることが推察された。子どもが歩いて通える範囲に、そうした居場所を設置し、幼児期から活用することが大切である。

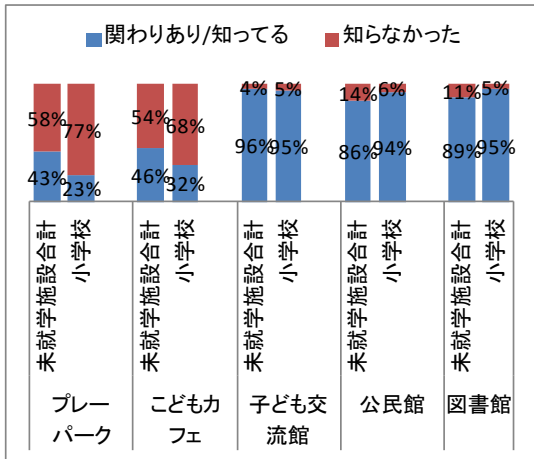
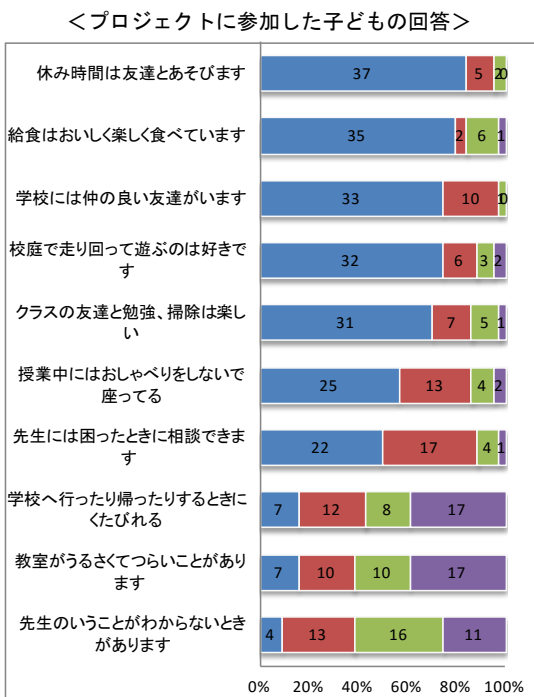


図3. 子どもの居場所との関係

(3) プロジェクトの効果

学校での適応の様子を子どもに聞いた結果を図4に示している。プロジェクトの参加の有無でほとんど差が見られなかった。差が見られたのは、親が子どもの学校での生活についての心配で(集団での行動・活動ができるか、授業中は集中しているか、いやなことをされたときうまく対処できるか、学習内容をよく理解しているか、など)、プロジェクトに参加した子どもの親の方が心配の程度が有意に低いという結果になった。また、自己効力感に関する項目では、プロジェクトに参加した子どもの方が自己効力感が高い方への回答が多く、特に「失敗するともっとがんばる気持がする」においてより有意に多くなった。



<プロジェクトに参加しなかった子どもの回答>

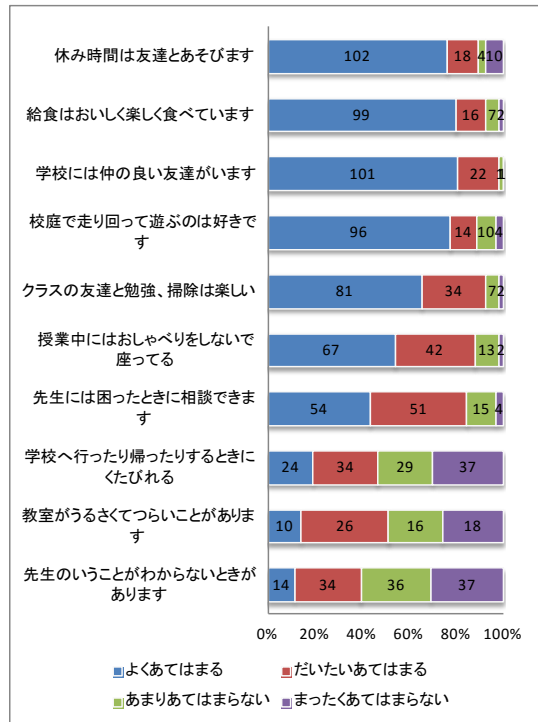


図4. 子どもの学校適応の比較

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

吉永真理 学校以外の居場所が担うエデュ・ケア機能：事例を通じた検討 子どもの権利研究 27：212-213, 2016

[学会発表] (計6件)

吉永真理、白岩繭子、鹿野晶子、野井真吾、幼児期におけるプレイパーク活用プログラムによる 効果の検証：親の意識変化に焦点をあてて 第62回日本学校保健学会、岡山コンベンションセンター、岡山県・岡山市、2015/11/28

吉永真理 学校以外の場所が担うエデュ・ケア機能：事例を通じた検討 子どもの権利条約総合研究所シンポジウム、早稲田大学、東京、2015/6/16

坂口祐太、吉永真理 子どもの外遊びの充実とけがへの対策：冒険遊び場の救急箱実態調査より こども環境学会 2015年大会、福島大学、福島県・福島市、2015/4/26

白岩繭子、鹿野晶子、野井真吾、吉永真理 プレイパークでの遊びと子どもの発達に関する研究2、第36回子どものからだと心・

連絡会議、日本体育大学、東京、2014/12/13

吉永真理、鹿野晶子、野井真吾 遊びの子ども
の発達への影響：幼児期から入学後までの
経過観察を通して第 61 回日本学校保健学会、
金沢市文化ホール、石川県・金沢市、
2014/11/16

白岩繭子、鹿野晶子、野井真吾、吉永真理
プレーパークでの遊びと子どもの発達に関
する研究 第 61 回日本学校保健学会、金沢市
文化ホール、石川県・金沢市、2014/11/15

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

研究協力者と協力施設・自治体へのフィードバックのために、結果をわかりやすく整理した報告書を作成し、配布した。図 5 は体力測定や GONOGO 測定結果についてわかりやすく記載し、外遊びの場が子どもの居場所として機能する点について解説を加えた資料の表紙である。図 6 は自治体でのつなぎプログラムの実態に関する調査結果を整理した資料で、協力施設及び行政の担当課に配布した。



図 5. 参加者と参加施設にフィードバックした報告書



図 6. 千葉市全市で実施したつなぎプログラムの報告書

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉永 真理 (YOSHINAGA, Mari)
昭和薬科大学・薬学部・教授
研究者番号：20384018

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

野井 真吾 (NOI, Shingo)
日本体育大学・体育学部・教授
研究者番号：00366436

高柳 百合子 (TAKAYANAGI, Yuriko)
国土技術政策総合研究所・都市研究部都市
施設研究室・主任研究官
研究者番号：10356024

木下 勇 (KINOSHITA, Isami)
千葉大学大学院・園芸学研究科・教授
研究者番号：80251148